

貞丈雜記

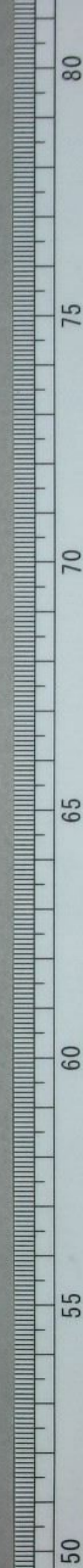
弓矢之部

十

ワ 3

233

10







弓矢之部

此部は、弓矢の部、記す。武具之部、記す。又は、記す。又は、記す。

伊勢平藏貞丈記

一弓とたりしと云る万葉集の部は、古執の梓の弓ト  
よきし古執と書てミとししとよむ之武士のふと  
物有る故と云る也と云るハとる也古ハと  
らしと云るは後六たりしと云るとたとふ普通なる  
る也又古ハ執の字を用てとらしと云るは後六多  
羅按し書るは後成恩す故兼良公乃何ハハハハ  
公受根原と云書しと云るは多しと云る天竺の貝多  
羅葉ハその長サ七人五寸也其の長と同一なり

233



唐詩鼓吹卷  
 五皮日休の園  
 載上人日本  
 帰ルラシ送詩  
 見多紙之経  
 文動之句ア  
 リ其詩見多  
 出摩寺伽陀園  
 長六七八冬  
 不凋トアリ  
 三十八ト云ル  
 註出如夏ホ  
 ツカナシ

二寸一多羅杖とヤヤとありは流石やま也翻譯  
 名義集シヤウキシウに云書あり天竺のものと書くる書也その  
 書目貝多羅樹ガイタラと云本ハ梭欄シロの如く少葉チウト云  
 一長八九十尺花ハ粟の如くあり人の云一多羅樹と云ハ  
 言サ七尺を云一尺とハ七尺を云る事ハ七尺ハ四九尺也  
 とありて七尺の事ト云るハ見えず多羅樹の事ト  
 云るハ亦合て云ふ本ハ出家のついで出ししなるか  
 る一したしひい盛回記セウキに云くやうの事ハ用グー  
 一弓矢と洞チウトと云る洞チウトとハ道具の事ト云る弓矢本  
 家の筆の道具の事ト云る洞チウトとハ後世の事ト云る

近代銃と兵具の考一ト一番銃と云名すりあり  
 て銃の事と道具の事ト同一心あり洞チウトと云名すりあり  
 日弓矢と洞チウトと云るハ後世の事ト云る  
 一矢をてらげと云るト云々犬追物の書ト公方極は  
 犬は追物は矢の事ト云るト云々洞チウトと云名すりあり  
 又云くはてらげと云る洞チウトと云名すりありト云々  
 一と云はてらげと云る洞チウトの事ト云也洞チウトと云名すりあり  
 又云くはてらげと云る洞チウトの事ト云也洞チウトと云名すりあり  
 一と云はてらげと云る洞チウトの事ト云也洞チウトと云名すりあり



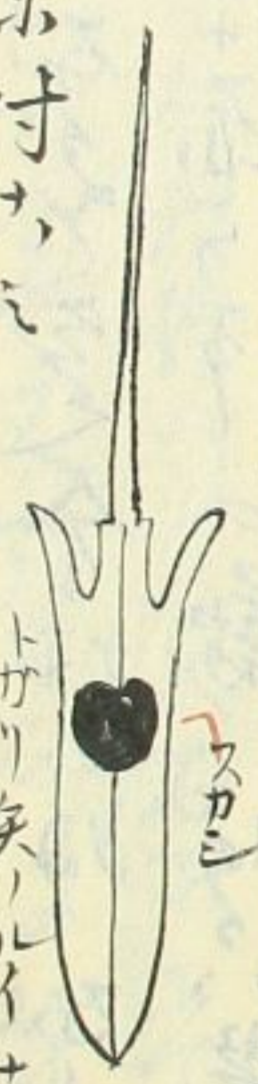




一曰記云墓目と引目とも書く負衡之ひきめといひ  
むき目とも書く也目亦風をひく是ひきめといふ  
を畧してひきめと云く是も一也目といふるは字  
を引目とひきめと云く引目とひきめと云くは  
るれといひきめと云く引目とひきめと云くは  
一也墓の字引の字といふれも子細なる事之一也  
墓目のひきめ墓のなく聲に似る故に名つらるとも  
云又墓の目と書く物と見らるる墓目と云くは  
生の物と射る物と名つらるる六墓の字といはれ  
こふ説を引く出づる物也墓目といふは麻鬼生の物と  
射る物と引く出づる物と見らるる射る物と引く

東鑑六  
引目ノ字  
ヲ用テ引  
往來ニハ墓  
目ノ字ヲ用  
テ假メテ  
也挽目ト書  
キタマヒ

む射す為本少作し之を引目と云くは  
ま中と云くは引目と云くは引目と云くは  
さう物と云くは引目と云くは引目と云くは  
むき目と云くは引目と云くは引目と云くは  
犬追物と云くは引目と云くは引目と云くは  
一引目と云くは引目と云くは引目と云くは  
さう物と云くは引目と云くは引目と云くは  
形あり人の胸に射る  
いふと云くは引目と云くは引目と云くは  
りけと云くは引目と云くは引目と云くは



トガリ矢ノルキナリトガリ矢ハ  
別ナリ下ニ書アリ

結ノ字ハハア





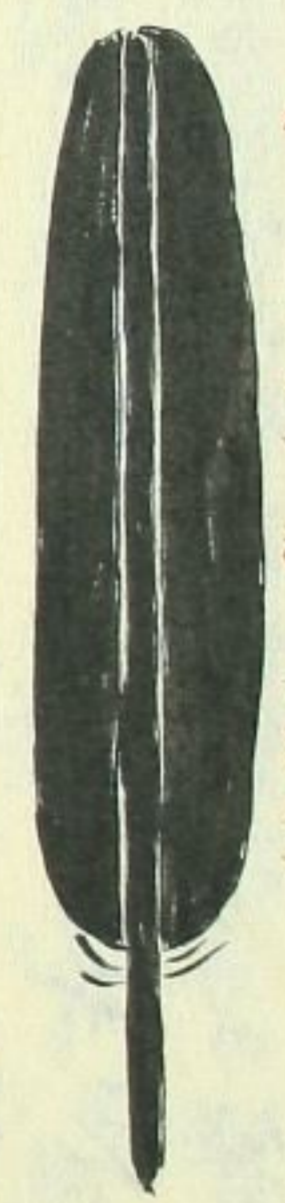


真名羽ノ夏  
 黒ッ羽ノ事  
 本間流聞書云  
 今ハ名羽トテ立  
 アルハカラハシテ  
 下也大々羽トテ  
 十四アルハ真名  
 羽トテ止セカラシ  
 ノホロバ黒羽ト  
 云テリ

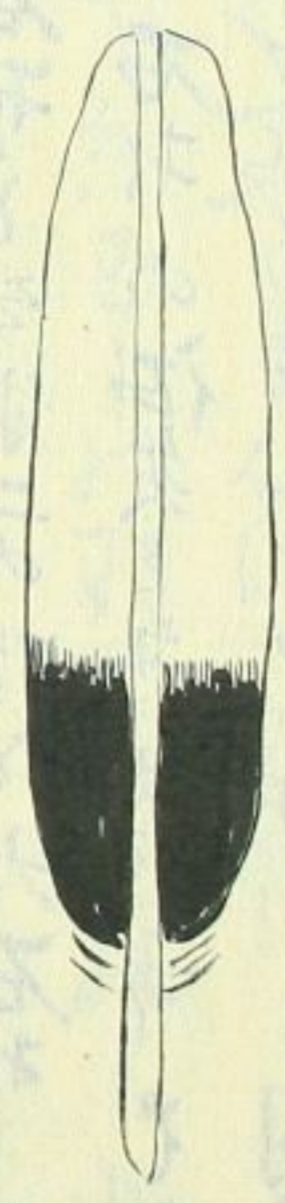
雪<sup>フク</sup>白<sup>シロ</sup>

此の字ニ心ナシタメ黒キ羽ト云テセ

黒<sup>クロ</sup>羽<sup>バ</sup>



本<sup>モト</sup>黒<sup>クロ</sup>



本<sup>モト</sup>白<sup>シロ</sup>



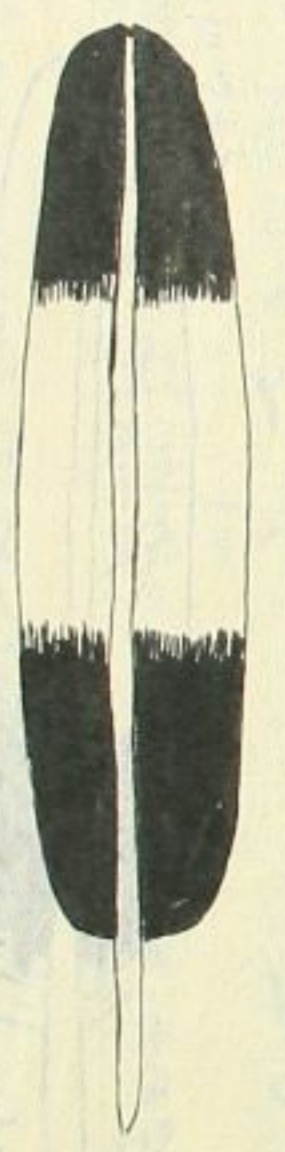
妻<sup>ツミ</sup>白<sup>シロ</sup>



妻<sup>ツミ</sup>黒<sup>クロ</sup>



中<sup>ナカ</sup>白<sup>シロ</sup>



中<sup>ナカ</sup>黒<sup>クロ</sup>













魯と書ク也古ハ肅慎國トシ一處たりの羽と多く候

しりしりけま羽射あはれきり物也ヤ信よりされハ

ふ後たりの羽と肅慎の羽と多ク肅慎と之國とト書

韓鞆國トシトハヒシ也ト於肅慎神代抄ニ見

一軍の時敵の初矢入の端矢ハ山を登鳥路鳥トラス蛇鴨ハナクハ

乃羽を何き少てし用る交通例之蛇鴨ト云ハ蛇と信

食ふ之後た也ト云後以羽を射しり又ふ後たりの

羽ハハの字の形ありとせりふ後と云

一至庶圓物ハニ神代ト云四目と射る

一野矢ト云ハ征矢のり少てハハ一征矢ハ軍陣ハ射る

夫木抄ニ氏記ニ為ふおひぬれいゆをちりすてしゆりやありたり

康矢ト云是り未で攻メテ東鑑卷三三ニ京兆彼野前行騰等又同卷嘉禎四年二月十七日將軍

野矢ト云矢也根ハ劔尾柳葉等の古あり用也野矢ハ麻シカ持カ

射る矢也是ハ征矢のことありあきしハ麻シカ持カハ

羽と云何羽と云ハ野矢ト云野矢ハ麻シカ持カハ

ハ張弓ト云事ハ神代の四弓ト云事ト云事ト云定ト云

有之ハ神代の四弓ト云ハ大日西雲等の持るハ

弓ト云皇孫子孫尊の天稚彦ハ持るハ

弓ト云瓊チノ杵シノの天降アメノり射チノ竹タケの注津ツルの持るハ

一弓ト云灌コ持チ弓ト云虎ヒコ出見デミの持るハ

弓ト云一神代との注也されし日昇記事記古事

記ス







一 本名くの名を付する物有り何事と古書に云ふ所の  
 名ども少きといふ所後人の伝言を依りて其物  
 一 曇目一腰といふ四の事也是は犬追物の時の事也古  
 一 四の腰といふ出る處の後六三の腰といふ一ツの腰  
 一 其物之物も本曇目一ツの事を一腰といふ人ありあやま  
 一 本やララといふ一本と云ふ事のもの 廿二廿三廿四  
 一 其も白木のちと云はうる所を 廿二廿三廿四 又云ふ  
 ぬつ本と白くしうまを是れ 廿二廿三廿四 的弓也 廿二廿三廿四  
 一 ぬつ本又云ふ字をおさうする上はぬつ弓を用く  
 一 ぬつ本と云ふ 廿二廿三廿四 村刺 廿二廿三廿四 佐量物 廿二廿三廿四 ぬつ本 廿二廿三廿四

一 際近通る一おきりの中と云ふ事 廿二廿三廿四 通す三つ  
 一 内六つをず 廿二廿三廿四 通し 廿二廿三廿四 下通 廿二廿三廿四 一と中と  
 一 不き 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 又村 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四  
 一 乃際と云く 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四  
 一 越や赤 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四  
 一 一口 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四  
 一 其也 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四  
 一 ぬ 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四  
 一 子 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四  
 一 つ 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四 一 廿二廿三廿四























きよめのせきほのるる前よき事こと一又古伊勢  
国園より不き作り出す弦と園弦といひ坂下より  
不き作り出す弦と坂弦といひたり事何れ小富教具の  
の紀一条兼良公の尺素雅来ふと見えたり是亦ハ  
名物ありたす亦の名をそつて之園といふ不き作り  
弦あり白弦といふ一々しる弦といふ一坂弦とい  
しとも如くあり一々しる弦のせきしとも何れ弦のこ  
り松之園といふ名をひりしよは何れす弦とせくと云  
祠のせくハ亦く心之弦は清系を去てむひりめのしどろ  
と、亦て各落よひれていづるありし一々しぬり

毎番でせく心之<sup>セキツル</sup>御弦と書之御字ハ亦く  
とそ字之又園弦先書ハりの園といふより出の弦と云  
一書をありのらと云ハ弓除弓を打ていし、けづり  
いそれし<sup>こゝろ切つて四角に</sup>まきとやうてありのらりそと云はる  
のらも進物といふ物<sup>一名ちまね</sup>弓握記をさるゝのらり  
よりちのこ<sup>こゝろ</sup>と云はる目と教ハの法は同ハ朝日大内屋  
より公方様五千法をさつ十法ハあるやゆひハ  
てをさる別より一<sup>名</sup>松ハありま<sup>名</sup>と云

一らの長サ七人五寸とさる大双紙にさるハ我ハかゆ亦七  
大カサくとき大ゆひくさゆひの(てそ七寸を五  
寸七尺カサ矢ハ二尺七寸五分上定ルツケハまに尺八

昔ハ一カ  
ララ付テ  
ツラ差テ  
巻テクサ  
キテ松ラス  
セサハ差  
ハナシト云  
タルツラ  
コトキハ  
事ハ今ト  
キリノル  
テ巻ナリ  
又ハナシ  
巻ニ



常用抄云矢つらり不こたれよの紐くは若共三人のひちりふこせすま

矢が二  
束あり  
未法不  
りきこ  
又云向  
ホコケ  
其云指  
セ尺寸  
寸法取  
靴上同

すは定め  
やうきの  
用害記云  
本ハ七尺  
人の好



すは定め  
やうきの  
用害記云  
本ハ七尺  
人の好

一 弓のふきりと定まる射の方寸書云弓のふきりの  
糸右の乳のわよとせずと何そたのふよとの  
てそとく石をおまりてもたをたす人すまと云  
そ人より弓のたきこくりきふぶる  
一 矢はかきサの事射の方寸書云矢は長サの事靴

と切き振るる  
すは定め  
やうきの  
用害記云  
本ハ七尺  
人の好

永仁布衣始記云矢黒海まサハシトアリサハシト云ハカケラトリタルラネアリ  
自管一  
矢は長サ  
一 夫と一  
今世ノサハシ  
ハカケラト  
リタルラネ  
アリ















木ノ事  
義徑記ニ  
見タリ  
木ナトナ  
廻リ守長  
六寸許ニ  
テ強ク射  
半是ヲ以  
船ヲ捕板  
ナトヲ射割  
物ト云也  
割ト云也



キスル

矢角

先ハ平ナリ

或ハ平ナリ  
先ハ平ナリ  
先ハ平ナリ  
先ハ平ナリ

一 矢ノキト云ハ角ノキト云トモ云ク角ナキコトモ  
キスルハ木棒ト書也木ノ柄ノ如クあり或ハ名付ル  
也鉄ナキ作之ズント云ルゾノ代リハ射之

一 矢ノキト云ハ角ノキト云トモ云ク角ナキコトモ

中ノ一ト云ハ良クヤト云ハ今キコトモ云ク

此ノキト云ハ本ノ形ニ似ル也大小ノちび

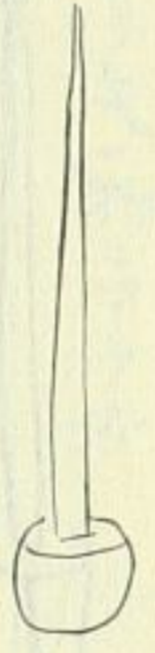
多ク一木ヨリ大クヤクヤクヤクヤクヤクヤクヤク

此ノキト云ハ本ノ形ニ似ル也大小ノちび



此ノキト云ハ本ノ形ニ似ル也大小ノちび

木ノ事  
義徑記ニ  
見タリ  
木ナトナ  
廻リ守長  
六寸許ニ  
テ強ク射  
半是ヲ以  
船ヲ捕板  
ナトヲ射割  
物ト云也  
割ト云也



矢角

先ハ平ナリ

一 矢ノキト云ハ角ノキト云トモ云ク角ナキコトモ

長短ハラカニヨルヘシ

サキモ四角ニテタイラク



矢角

一 矢ノキト云ハ角ノキト云トモ云ク角ナキコトモ

目ヲ取ルゾノ代リ射之キスルノ物

一 矢ノキト云ハ角ノキト云トモ云ク角ナキコトモ

目ヲ取ルゾノ代リ射之キスルノ物

目ヲ取ルゾノ代リ射之キスルノ物

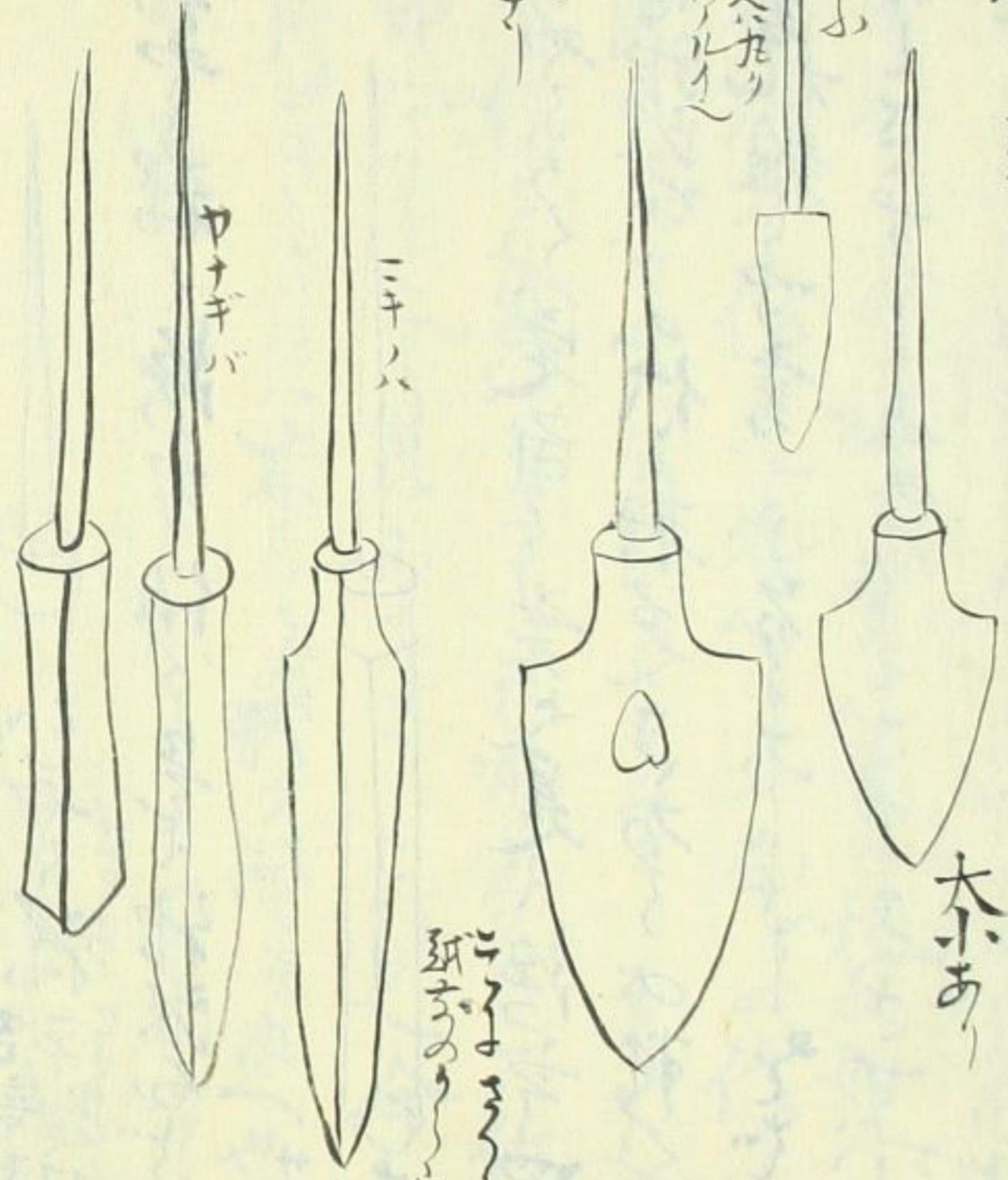
目ヲ取ルゾノ代リ射之キスルノ物

常用集  
蝶見ハ矢ノ根也ト見ユ



矢尾と事くと 鋸鋒圖彙に見る 後身は 矢  
 尾の事

毛の  
 自天  
 シキ  
 平キ  
 アラス  
 ノアル  
 アラス

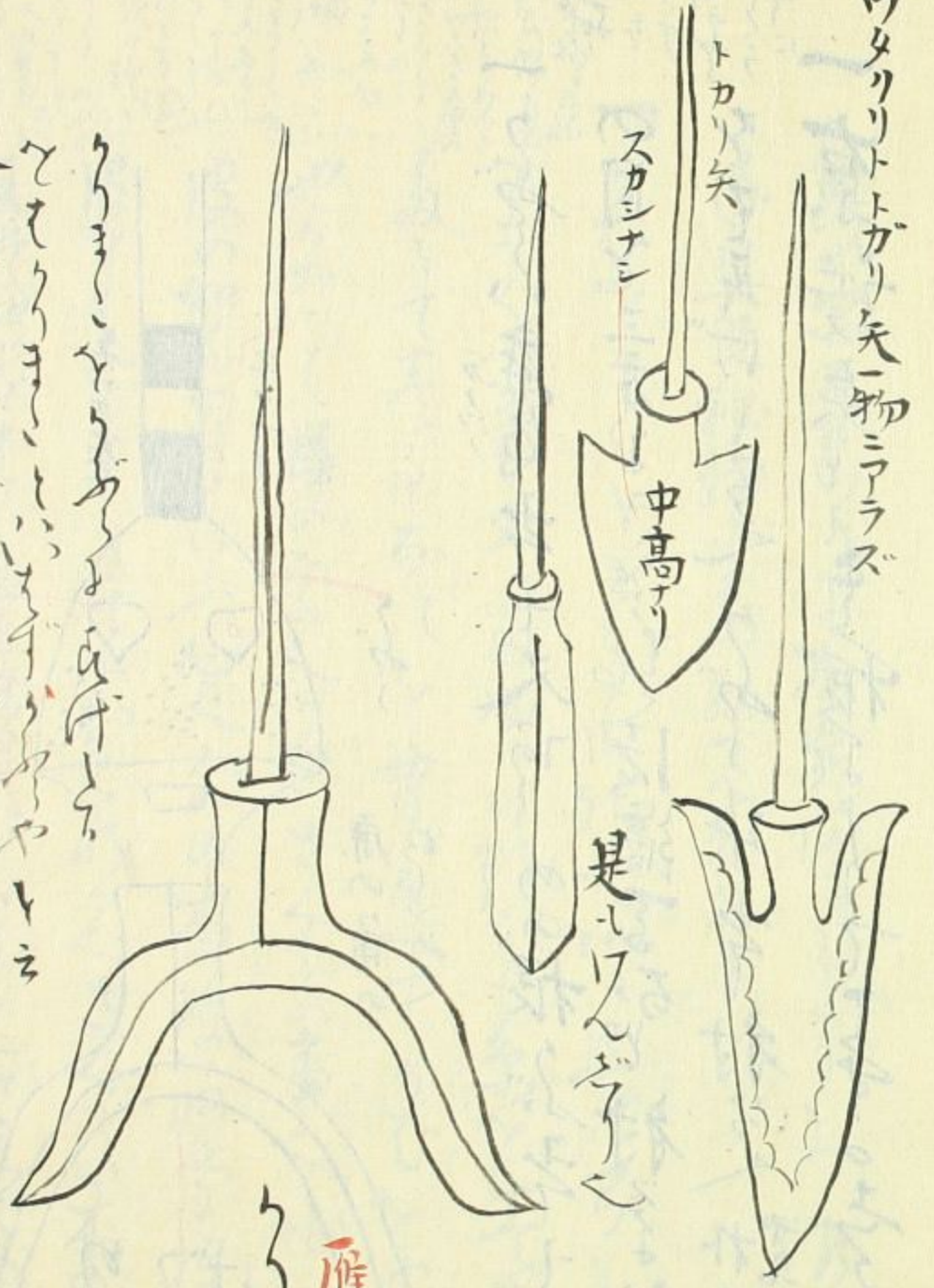


木ノア  
 同

此の  
 矢の  
 形は

まきの  
 やあ  
 形  
 矢  
 事

ワタリトトカリ矢物ニアラス



トカリ矢  
 スカシナシ  
 中高ア

是ハワレノ事

鴨線

雁股

矢の  
 形は  
 矢の  
 形は  
 矢の  
 形は











秘のひあまて射あゝるゝのりつゝ

参考保元物語に徳和八郎為射の事や記し

下す矢の根指被多古や一のりつゝのよことくあつ物

をさきりそり厚さの度さす長さ守よりせ

まろきとをさし管のりつゝとせと一のりつゝと

根の存の方矢りの切足と定同記すのりつゝ

ヤとと一のりつゝのりつゝと切す

つゝ字揮の字で用せどもあやまらぬ

くくつゝ心すまろりつゝとせと一のりつゝ

一乃云ととる武具の部記す

又ヤウシカクモ云飲九根トヤウシカクトハ別ナル也

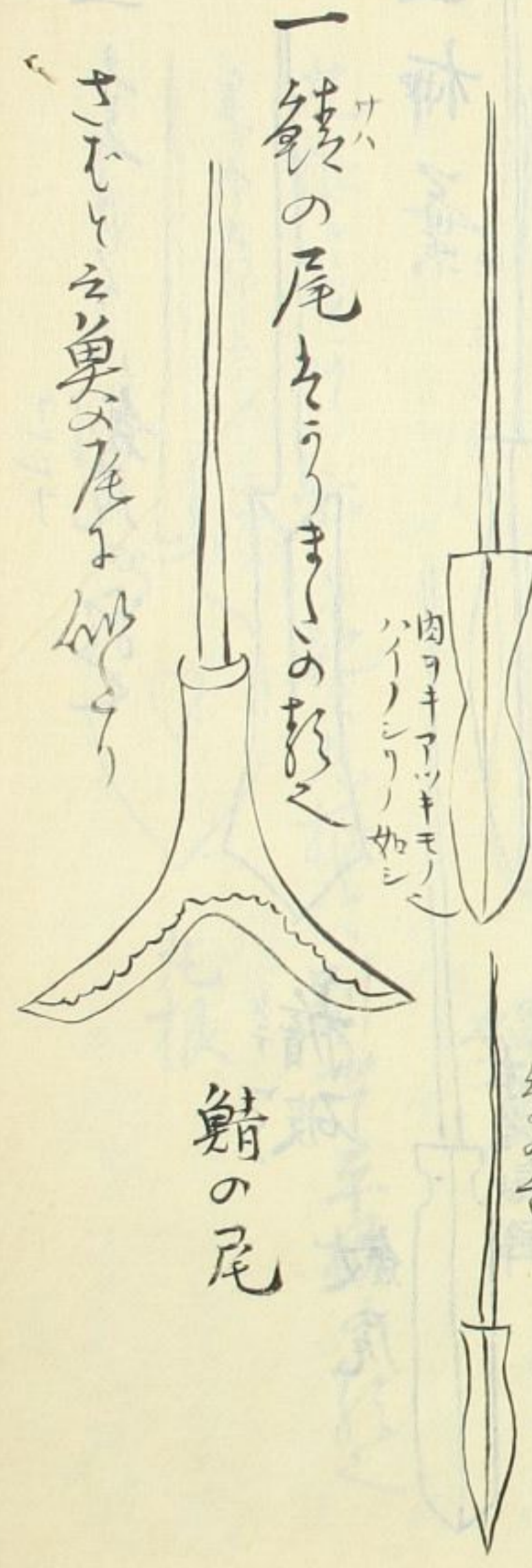
一丸根と云矢りハ槇葉の如く

射半具豆秘傳云征矢ノ根ハ丸根本也

丸根

一舌の舌と云根も槇葉の如く

のきを毎文板葉の類之丸根



さむと云莫の尾の如く

鯖の尾



























内向の  
ち向と  
射向  
射向  
射向

すちちと見えしう物の射は形を何ぞ乃そあ  
昔の射は平家の矢と云 犬追おまふは乃をたむ  
てあつては射はは矢さけひのり 吳説多れは  
沈ぼるも偽多し用くし平家物語夫木折射向記  
を射向とすし矢さけひは矢さけひと云と云

一矢は内向と云矢と云つて羽表我身の方むは  
ちと云外向と云ハ羽表我むあ方む向する内向  
と云す 的さるるす一はあ家之外向とハ甲矢り  
射る内向と云矢射る之外向陽の内向陰陽  
の矢と云す陰の矢と後云云云  
内向外向的矢か  
と云す矢のり

ト云キ  
一外向と見矢射る内向と見矢射るといふ事と急  
に定する法式ハハのされ右のめくあると云  
云也されハ法量物大的神降記に定後ハを射と云  
外向と云す射と云す定後ハを射と云す何ぞ  
以て定後ハハのさるると知し又的の射記に見矢  
射るすしと云す射と云す射と云す射と云す射  
内向と見矢射るは射る秘法の間を也れく射  
るす射るす中射と云す是と考まハ定後ハ  
射る秘法と云す  
弓を射るを云すやと云す内向外向と云ハ







竹ト木ノ合タルヲニラカフナシ

折釘の事を知一又彈の事と沈と事古は  
るやうに入らるる事 平板の盛衰記に平彈と云  
限の沈うち

一矢の眞よりきみといふまゝに  
管竹の事と云ふ事竹と云ふ事あり

中一の五

源平盛衰記 卷十九八枚夜 射りては

一 神道のうめ 夫と云ふと云ふのくがの事 宝弓兵  
不帰をを承継しぬる一 是ハ筑紫の守八幡

射残セル中

射りては又云  
三人張三矢ノ  
中判取テツ  
カニテニホ  
ヨリカケタ  
○或説云シ  
ラハ神通ヲ  
シテモヨム  
目ナニカケ  
トテ目ヲクリ  
アケサルカ  
ナクトスモ  
又ニ説セ

天子はあそびに矢を射るとし 紫の系争 卷二の如き  
とく、とく今も系争と云ふ事 是を神通卷と云ふ  
自丈之神通の隔矢と云ふ事 射る方入用  
古傳書に云く 是ハ田村系伝といふ古き物語 神通の隔  
矢と云ふ事 是ハ後の人々の妄作と云ふ事 田村系伝ハ  
神通の隔矢の事 何れハ神通の隔矢 神通の物 具  
神通の車るとし 貝えと云 佛法の流し 神通といふハ  
身の不思議 奇事ト通達する事と云ふ事 物と云  
身いふ事 神通の何しといふ事 一ノ二ノ事  
式何の事 神通の何しといふ事 後人をも名傳へ 妄作といふ大

追考神通  
鑄ト云ハ  
何ノ故ニケ  
トモ其考  
ミテ為ニ  
セシガ  
ノ事ハ  
中ノ事  
武ノ事







追考  
 白卷上六  
 カシキ  
 事ナリ  
 中百  
 真ノ白  
 五ノ木  
 九ノ木  
 九ノ木

一説ニ大及  
 白子  
 天宣  
 小信  
 未本  
 信安

流編より弓ハ重々矢ハ如也と云ふ事  
 白卷弓之白卷と云く所云はまらり  
 別之流編馬用白卷弓と書之重々ハ白卷と云  
 一弓の重打のる上強く是天武守禮ハ成る也  
 一之是ハ好せ多と云はる  
 十九代天智天皇の法時麿生ハ物多と云て帝と云や  
 一弓ハ好秋ハ重々矢ハ如也と云ふ事  
 一弓ハ好秋ハ重々矢ハ如也と云ふ事

神代ハ下  
 張弓ト名  
 付テ上ノ  
 頭ヲ作ル  
 弓アリ是ヲ  
 越王蛇ト云  
 作ル是信  
 事ハ蛇ト云  
 事ハ蛇ト云

一弓ハ好秋の蛇をくくはる也と云はる  
 一説非之用一弓ハ好秋蛇と云ふ事  
 本草綱目西頭蛇の注ハ越王弩弦之所化之是ヲ  
 越王蛇ト云 枳首蛇ト云ト云ハ又唐生ハ此也  
 乃形盈の中よりけり蛇の形のみくハ又云ク容  
 益の酒を吞て病を煩ひらるト云ハ書言故事  
 蛇の形のみくハ又云ク容益の酒を吞て病を煩ひらるト云ハ書言故事  
 蛇の形のみくハ又云ク容益の酒を吞て病を煩ひらるト云ハ書言故事



一 的のこ海ふと虫尤り眼より、よりの眼ハ五尺許寸  
 可一 取今も大サオ大的を仰り射る虫を退治ス  
 此意也と云流河 虫尤とハ唐の昔の悪人之  
 黃帝と云みちるる 此流用( )  
 サニ海ふことハ人之眼の黒目の中のひとこの事之  
 的の思ミしそれハ似れハこ海ふと云之を同以て  
 此為ヨ書うが自然に眼ハ似る之虫尤が眼を以て  
 くまひらるまのつす又ハる唐人ハサセト云守り大  
 一 弓の外竹内竹系竹と云事射る射的の方(向)を  
 三好亭(佛成)に云ゆかの子云竹杖ハハ能右位の説ハ竹杖ハ  
 外竹と云系竹と云我身の事一向と云門竹の事  
 一 弦の教一條一張一桶の事物教の秘に記ス

耳露寺  
 定成(マノ)  
 矢師草  
 羽上(白羽)  
 黒羽(シキリ)  
 申傳(マシ)  
 シキト云々  
 ト云フ後シ  
 ラハ出シナリ



一 志きりもまの矢と云ハ白羽と黒羽とつき合せて中  
 黒又ハ中白又ハつま黒又ハつま白なるの如くまくり  
 白黒のまくりと云立らぬ志きり 羽と云

未木集  
 保安元曆記  
 幸ノ時府生  
 卷長(子録)  
 五島羽系  
 青填(羽)コレ  
 ヲ新調(鳥)  
 踏ノ羽ヲ以テ三存切續キタリ

青月音(羽)コレ  
 未木集(羽)コレ  
 保安元曆記(羽)コレ  
 幸ノ時府生(羽)コレ  
 卷長(子録)(羽)コレ  
 五島羽系(羽)コレ  
 青填(羽)コレ  
 ヲ新調(鳥)(羽)コレ  
 踏ノ羽ヲ以テ三存切續キタリ

白羽と黒羽と二色をつが合せて白黒の志きり  
 と立ると云ハななる羽の矢のごとく  
 小志きりなり志きりその矢古公ふり  
 用られし事古書ニ云ハ

小限繕又支切繕  
 志きりたるもの云ハ松急人ナリ



一木少く  
見らるる  
ハサキト云  
木也又ハサ  
カキト云  
大和木草云  
杉并順和名  
比佐加木西  
土ノ民俗小  
柴ト云  
毎木サレ花  
ニ似テ黒墨  
實ト云王篇  
曰於似荊可  
作  
深衣者少今  
俗ハサキト  
云其灰汁ヲ  
用テ布ヲ染  
ム  
黄色ナリ木  
草諸書ニイ  
テ未見之云  
田村元雄云  
ハサキハ遠  
州ニアリ大  
和国宇太郎  
方言臘羅椒  
ト云  
ハサキ事ト  
云之葉ヲトリ  
カニニツクレ  
ハ黄黒色ニ  
ナルト云又  
何ノ人ノ云  
一名ハサキ  
ト云

一、くらくらしと云本少一子之くくく似、る思す云  
見らるるハサキト云木也又ハサカキト云之  
大和木草云杉并順和名比佐加木西土ノ民俗小柴ト云  
云毎木サレ花ニ似テ黒墨實ト云王篇曰於似荊可作  
深衣者少今俗ハサキト云其灰汁ヲ用テ布ヲ染ム  
黄色ナリ木草諸書ニイテ未見之云田村元雄云  
ハサキハ遠州ニアリ大和国宇太郎方言臘羅椒ト云  
ハサキ事ト云之葉ヲトリカニニツクレハ黄黒色ニ  
ナルト云又何ノ人ノ云一名ハサキト云

木棒ト云  
故木ニテ  
作ルカ本  
ルレトモ  
木ノ畧ニ

追考  
万葉集  
歌ニ棒ヲ  
血夜音遠  
音トアリ  
ツヨロトモ  
云ハシ  
イロヤ  
五音通スル之

作ら之 木ヲ木棒ヲ削ル事 應仁記曰神保宗在馬耐  
安富民邪許一使者とを今新矣負の史河原より  
矢著陣セザル者本棒と云合カレトヤ者云々  
むら、本の棒の如く丸くして、ハサキを車に切る物也甲  
曹らどに透さず透しぬゆゆの焼強く、イ敵を  
耐倒れ之本より、似し物、鉄の本棒を畧ニ名物ニ  
一矢をば、海よりと云河は海屋矣云々河原之原平  
盛衰記云甲三遠矣、宗長三浦、宗長と云り  
くとは、海原より、又、宗長と云、宗長、名を、  
イ、海原より、海原、名、宗長、名、宗長、名、  
五音通スル之、格、名、宗長、名、宗長、名、



東鑑 卷之九  
四年十二月  
石橋合戦之  
日 征俊が  
鎧、袖也作  
所 三平比持  
翁 口巻  
三三三  
任俊

右の子少ひひりかき、是つきやるれ<sup>ニヤリ</sup>仇遺と云之書  
裏記の仇遺の二字を用ひ、<sup>ニヤリ</sup>万葉集の仇夜トアリ  
一矣云々、乃る乎平家お清の書卷より一葉むらひ  
く和田山右平義盛と云る乎書付ける、盛裏  
記の羽木一寸斗云々、三浦小太郎云々、焼給云々、  
乃又同書、黒漆の矢の十四束、あるや、只、  
と削り、乃は、新居紀四郎宗七と書付、又東鑑  
に、新居口巻之上、注、院口三郎、系、経、俊、又、云、  
に相模国住人、中、間、強、常、重、氏、り、小、刀、の、さ、き、云、  
を、り、け、り、き、弓、馬、攻、実、云、云、平、の、事、云、云、書、也、是

成の時入上  
大の時射ル  
上云心ヤリ

ハ平人も、成の時、入上りの節、の色、云、云、書、云、云、貴、院、也、  
ト、云、云、貴、院、也、云、云、け、り、の、色、云、云、書、云、云、の、節、也、  
け、り、の、色、云、云、走、羽、の、通、り、一、方、云、云、一、也、別、名、  
系、計、り、く、お、之、南、世、八、国、云、云、の、名、云、云、書、云、云、の、門、の、誰、  
と、我、名、と、書、云、云、中、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、  
物、記、云、云、大、村、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、  
羽、中、お、つ、の、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、  
云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、  
云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、  
成、の、時、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、  
自、丈、按、矢、云、云、書、云、云、



羽中おとりの節此げや之書くハ燒給燒不のあし  
 ろろろーニテモ書ク墨少てしかく小刀のさき少て  
 書く又書羽不可計のけり書留等より上り  
 書之又玉不名の官名字それの内旅と書くハこゝろ  
 六的矢ふし常し射る矢ゆるし是ハ名字計書  
 軍陣の征名ハ國不名の名字下書する  
 之取ハ歌よ知るせんハ乃之犬追おの時の矢志る  
 紋とかくるハ人馬ハ我名と書せしき乃之と  
 紋ハ家の定紋と字ハ何ふしん気と給く  
 一後三年の画よんえしる弓ハ丸木弓須竹と合せし

弓能矢射り一馬左の如し



一後三年の画よんえしる弓袋左の如し



弓袋差の役る是テおし紫米打さし丸筒  
ハツタレ ケンヤウサナリ

一原三位頼政の如くと多收物や射れし弓とハ雷止動と  
 名づけしものや書てハ水破無破と名つけし水破と云  
 矣ハ黒鷲の羽と書てハ水破と名つけし山名羽也











貞丈云はるし弓の事ハ夫木抄よりし琳賢は作ら歌  
少考下 夫木抄云

天仁元年頭垂郷家歌合

琳賢は作

いふせ人五木の弓の事とすればひよとちうに、  
木子うき木の弓とちうきりしよの事よよの事と云ふ

は歌よりほき木の弓といひ下のひよとちうに、  
とちうきりしよの弓とちうきりしよの事と云ふ

心とちう考ふるよ木竹を合さうとほき木の弓とちう考下

才云の向の様の弓の事として事とちう考ふるよ木竹とちう考下

ほき木の弓といひ木の弓の事とちう考ふるよ木竹とちう考下

也木抄の弓といひ木の弓の事とちう考ふるよ木竹とちう考下

この歌は、  
左の歌は、  
右の歌は、

いふせ人五木の弓の事とすればひよとちうに、

は歌よりほき木の弓といひ下のひよとちうに、

心とちう考ふるよ木竹を合さうとほき木の弓とちう考下

才云の向の様の弓の事として事とちう考ふるよ木竹とちう考下

ほき木の弓といひ木の弓の事とちう考ふるよ木竹とちう考下

也木抄の弓といひ木の弓の事とちう考ふるよ木竹とちう考下

いふせ人五木の弓の事とすればひよとちうに、

は歌よりほき木の弓といひ下のひよとちうに、

心とちう考ふるよ木竹を合さうとほき木の弓とちう考下

才云の向の様の弓の事として事とちう考ふるよ木竹とちう考下

ほき木の弓といひ木の弓の事とちう考ふるよ木竹とちう考下

也木抄の弓といひ木の弓の事とちう考ふるよ木竹とちう考下



射字を萬々<sup>ニ</sup>岐由美<sup>キニ</sup>とよむるハ其細の字、麿<sup>ニ</sup>對  
 此の細<sup>ニ</sup>九木弓の<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>松の<sup>ニ</sup>舞<sup>ニ</sup>畧<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>射<sup>ニ</sup>して  
 本<sup>ニ</sup>竹<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>する<sup>ニ</sup>弓の<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>松<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>細<sup>ニ</sup>森<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>萬<sup>ニ</sup>々<sup>ニ</sup>岐<sup>ニ</sup>由<sup>ニ</sup>  
 美<sup>ニ</sup>細<sup>ニ</sup>射<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>當<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>延<sup>ニ</sup>喜<sup>ニ</sup>式<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>え<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>  
 庶<sup>ニ</sup>々<sup>ニ</sup>伎<sup>ニ</sup>箭<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>萬<sup>ニ</sup>々<sup>ニ</sup>岐<sup>ニ</sup>由<sup>ニ</sup>美<sup>ニ</sup>より<sup>ニ</sup>具<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>延<sup>ニ</sup>喜<sup>ニ</sup>  
 式<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>庶<sup>ニ</sup>々<sup>ニ</sup>伎<sup>ニ</sup>箭<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>伊<sup>ニ</sup>多<sup>ニ</sup>都<sup>ニ</sup>伎<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>形<sup>ニ</sup>ヲ<sup>ニ</sup>射<sup>ニ</sup>セ<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>門<sup>ニ</sup>部<sup>ニ</sup>府<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>  
 海<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>好<sup>ニ</sup>能<sup>ニ</sup>射<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>財<sup>ニ</sup>射<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>村<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>め<sup>ニ</sup>され<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>考<sup>ニ</sup>  
 考<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>海<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>弓<sup>ニ</sup>海<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>矢<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>的<sup>ニ</sup>的<sup>ニ</sup>射<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>用<sup>ニ</sup>さ<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>矢<sup>ニ</sup>  
 あり<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>延<sup>ニ</sup>喜<sup>ニ</sup>式<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>弓<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>仰<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>記<sup>ニ</sup>され<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>  
 弓<sup>ニ</sup>仰<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>料<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>用<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>物<sup>ニ</sup>組<sup>ニ</sup>集<sup>ニ</sup>添<sup>ニ</sup>角<sup>ニ</sup>草<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>え<sup>ニ</sup>

ハ<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>竹<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>ど<sup>ニ</sup>き<sup>ニ</sup>ん<sup>ニ</sup>え<sup>ニ</sup>ず<sup>ニ</sup>され<sup>ニ</sup>延<sup>ニ</sup>喜<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>比<sup>ニ</sup>ハ  
 海<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>弓<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>矢<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>海<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>矢<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>え<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>  
 海<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>矢<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>海<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>弓<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>必<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>

一 白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>す<sup>ニ</sup>た<sup>ニ</sup>矢<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>す<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>  
 不<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>す<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>略<sup>ニ</sup>して<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>  
 羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>略<sup>ニ</sup>して<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>  
 事<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>略<sup>ニ</sup>して<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>

一 條<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>矢<sup>ニ</sup>古<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>み<sup>ニ</sup>え<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>略<sup>ニ</sup>して<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>  
 海<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>略<sup>ニ</sup>して<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>  
 と<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>羽<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>略<sup>ニ</sup>して<sup>ニ</sup>あり<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>



















ぬ山中よりくひくいとひめやし

一犬追物弓のまうりそ松田田原射御秘伝書より歩まう

の松田中をゆけすまうりそあせりそまき

一弓のみはまると古、薛少をさうりす弓、薛少をさうりす

薛少管少をさうりす弓の内心よりまうりす、現在之松田

物三種日正位知事の松田、そのまゆはうりまゆけ

一まゆひらりとまうり、東鑑卷廿六、貞應三年、まうり

年冬比高平人棄松流亭、干越後国寺泊浦、仍今日式

部大夫朝時執進其弓箭以下具是若君御方則賢

部大夫朝時執進其弓箭以下具是若君御方則賢

北条陸奥守

之奥州以下群参弓二張、假令如常但願短

又参考太平記、治、余、足利直久、大内舊跡大極殿

の額門の跡、まは布了、まは、まは、まは

流、清、まは、まは、まは、まは、まは、まは

鞋、まは、まは、まは、まは、まは、まは

按、まは、まは、まは、まは、まは、まは

と、まは、まは、まは、まは、まは、まは

ま、まは、まは、まは、まは、まは

東、まは、まは、まは、まは、まは

一竹箭、まは、まは、まは、まは、まは



一を海らの事 祝儀の部よりある一を去る

一糸裏の弓と云ふ是を軍弓之弓の竹の上段と云  
ばは海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは

より本をぬきと云ふは海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは  
漆で包んである

糸の上と云ふは海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは  
時麻のまじりたるぬぐひてつやをぬきと云ふは

るる一を里ぬり終りしと云ふは海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは  
本陣者へは海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは

是は海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは  
は文字をぬきと云ふは海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは

或説三梅檀ハ  
二葉ヨリカフ  
ハニキト云フアリ  
セシキニキハニ  
葉ノヒラキタル  
成セト云又ハ  
ラハスト本ハツ  
トニ所アルユヘ  
ニ葉ニテアリ  
ラヘテ梅檀卷ト  
云ト云ヘリ

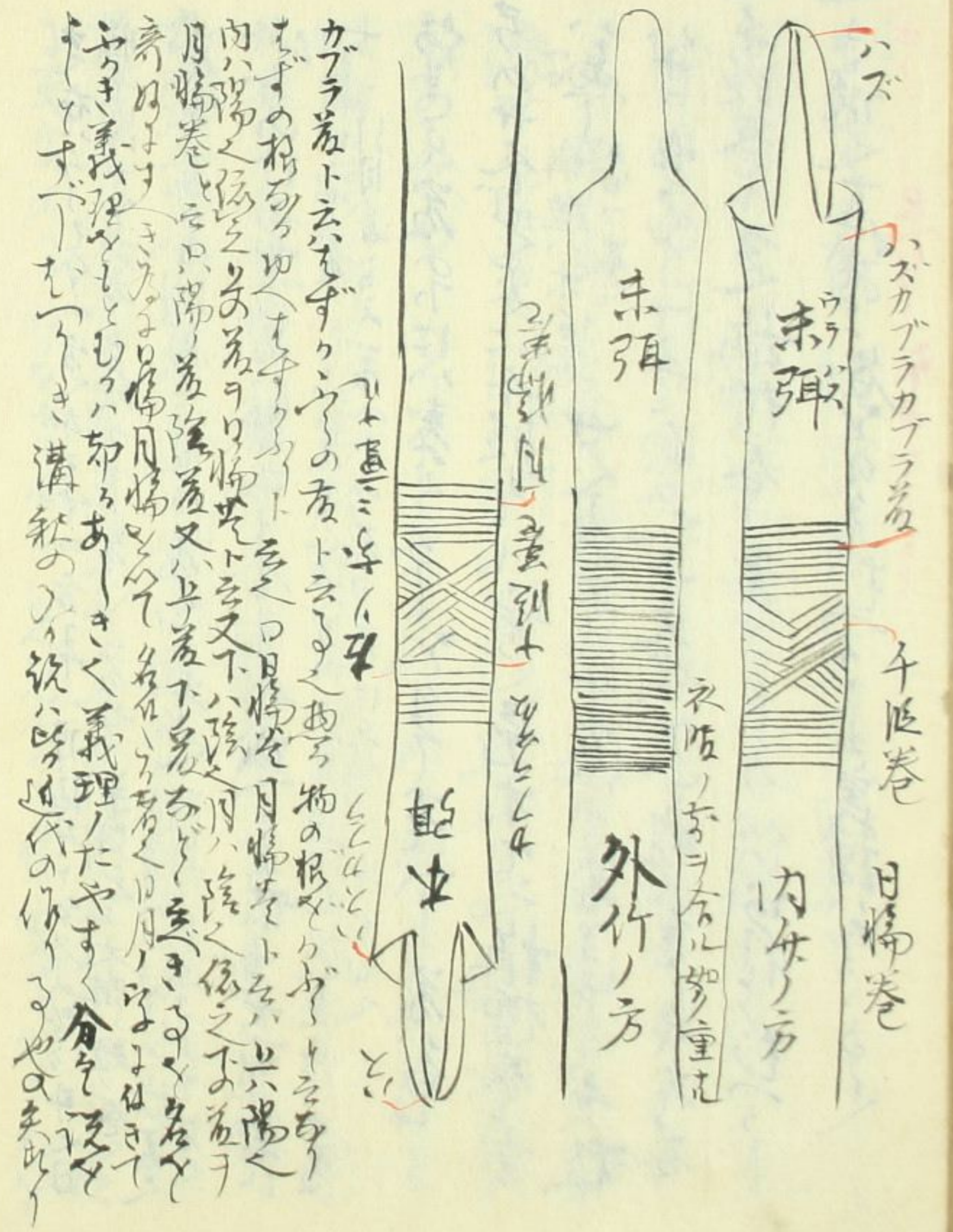
是右の如くも亦の方之本と云ふの方本ハ月梅と云ふ名を以て申之日  
梅卷の次也と云ふを主として云ふは海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは  
是ありの事引目して其の意と云ふは海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは  
此方のけしやうは海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは

一弓のせんぬきと云ふは海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは  
は海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは  
は海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは  
千段巻と云ふ梅檀巻と云ふは海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは

是説之真物と云ふは海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは  
は海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは

是海らに訂正のふよまの麻のより糸裏と云ふは





カブラ者ト云はざるの者ト云ふは物根をかりがらんとす  
 ざるの根をかりがらんとすは物根をかりがらんとす  
 内方陽之依之りの者なり物根ト云ふは日輪巻ト云ふは日輪巻  
 月輪巻ト云ふは日輪巻者又上者下者なり又上者下者なり  
 舟中義理なりとむらあしきく義理ノたやすく舟中義理  
 舟中義理なりとむらあしきく義理ノたやすく舟中義理

の者ハふきりの上の者之射時矢ヲ出れり故矢出りの後と云ふ墓目  
 墓目の者ハふきりの下の者之是公之御天追おふと墓目ニ村ニ  
 墓目ハ沙土なり何なりと云ふはふきりの下ニ沙土なりと云ふは  
 舟中義理なりと云ふは又墓目ニ人と村ニとすも舟中義理  
 陣の弓者墓目なりと云ふは又墓目ニ人と村ニとすも舟中義理

一 年突矢と云物何れ物神矢の如くおらして居あすけず  
 もあおて投げしきま富く物之をよハ今の世の年雜劔  
 と云物めしきま富く物之をよハ今の世の年雜劔  
 富くしきま富く物之をよハ今の世の年雜劔  
 帳のは書者金村と云三塔名卷の魚伊何の鏢の上ハ大世  
 目の様と云て彼お長刀の三のギニて草蒲形なり  
 へ眼は扱は鼠の太サハ鼠の人の墓目かよハ此物なり

年突ノ矢ノハクヤクニ云フトキナラ



三年竹をたけりし押割長形其の鎌の五分敷を程多と  
答本と中心を打通しヤヤ程がすけ出巻の上の琴乃  
糸を程程とせりし世にやうとを程のかくま自心  
ありていしとちをいおす是は子御にせんう為にり切岸  
の面より二王亭より名乗りのは是年三拜寺の合殿  
の張布をたけりて越後より流されしめ親陵の言因懐  
全村より秋より一城申の人をば是より進せりし  
此むとせりては流し下りてきりし小島をたけりて櫓の小  
島より其の突を突しりしは其得所をたけりし陰よりり  
りて流し下りてせんあひのほり後の徳角より金物と裏

表二重を通りて矢先二守計ゆり下りり石中兵衛より  
居りて二重しりて死すりし中兵衛  
是よりりて不令村と手  
突の因懐りし名はりり

一 幕目より獣と射取りしありて東鑑卷三十四仁治三年九月廿二日  
云左親衛自藍澤被歸數日踏山野然猪鹿多獲之  
其中然一者親衛以引目射取之為先代未聞珍事之  
由諸人一同感申之猛々然と引目を射殺しり其之  
弓力の甚強き故引目の中骨砕けて死しり其の  
子に記しり馬よの人を射殺りし七回弓力強き其の  
一 百矢とせりし其の書はりし是は是の事とす而た



る箭まきく侍の者も負ふと云ぬ一太平記十七卷  
山門攻急白多の羽少を平一矢の十中三つを射りしと  
百矢の中より一を射りしと云ぬ又同巻百矢  
二腰の者も一を射りしと云ぬ三腰の者も一

矢を射りしと云ぬ

一野矢征矢の事既前記東鑑卷三十二童野前候

御興右童征前候御興左又同卷三十四宿老帶野矢

若軍為征矢と云ぬ美別河征矢八逆頼俊黒塗服

少盛野矢ハ狩能能誦少成等て負一る云一箭ハ

野矢征矢と云ぬ

野矢ノ事  
既前記  
東鑑卷三十二

又東鑑卷三十四宿老帶野矢ノ事  
征矢四十未協之輩帶野矢ノ事

野矢ノ事  
既前記  
東鑑卷三十二

一野矢の羽の事やれる少盛系兵庫助長次記云御

物傷の御侍に於て之を射りしと云ぬ

と云ぬ

羽の事やれる少盛系兵庫助長次記云御

物傷の御侍に於て之を射りしと云ぬ

と云ぬ

羽の事やれる少盛系兵庫助長次記云御

物傷の御侍に於て之を射りしと云ぬ

と云ぬ

羽の事やれる少盛系兵庫助長次記云御

日本記敏達  
天皇  
御箭射  
野矢ノ事

又野矢ノ事  
既前記  
東鑑卷三十二



一 八百箇矢の事日本記神代卷に見たりは八百箇矢の箇  
 矢の目と今つけらるるありと之流あり非るなり神  
 道の書にも多きものと云ふは八百箇矢の八百箇神大八箇  
 今恒ハ多きハ年代八岐大蛇八十白人の尋ねたるの  
 皆多きものと云ふは八百箇矢にてはより多きものあり  
 乃れ八箇の十と降けは心之略せる後と云く  
 存りありんやれ限るべく多きものと云ふは神道の御  
 八と云ふ八百箇の目の数を定めて今あるものあり  
 目と多きものありと云ふものと云ふは八百箇と云ふ  
 一 大切のりあるハ八百箇と云ふと云ふは八百箇と云ふ  
 白朮の粉と云ふは八百箇と云ふは八百箇と云ふ  
 白朮の粉と云ふは八百箇と云ふは八百箇と云ふ

八百箇矢の事日本記神代卷に見たりは八百箇矢の箇  
 矢の目と今つけらるるありと之流あり非るなり神  
 道の書にも多きものと云ふは八百箇矢の八百箇神大八箇  
 今恒ハ多きハ年代八岐大蛇八十白人の尋ねたるの  
 皆多きものと云ふは八百箇矢にてはより多きものあり  
 乃れ八箇の十と降けは心之略せる後と云く  
 存りありんやれ限るべく多きものと云ふは神道の御  
 八と云ふ八百箇の目の数を定めて今あるものあり  
 目と多きものありと云ふものと云ふは八百箇と云ふ  
 一 大切のりあるハ八百箇と云ふと云ふは八百箇と云ふ  
 白朮の粉と云ふは八百箇と云ふは八百箇と云ふ  
 白朮の粉と云ふは八百箇と云ふは八百箇と云ふ

八百箇矢の事日本記神代卷に見たりは八百箇矢の箇  
 矢の目と今つけらるるありと之流あり非るなり神  
 道の書にも多きものと云ふは八百箇矢の八百箇神大八箇  
 今恒ハ多きハ年代八岐大蛇八十白人の尋ねたるの  
 皆多きものと云ふは八百箇矢にてはより多きものあり  
 乃れ八箇の十と降けは心之略せる後と云く  
 存りありんやれ限るべく多きものと云ふは神道の御  
 八と云ふ八百箇の目の数を定めて今あるものあり  
 目と多きものありと云ふものと云ふは八百箇と云ふ  
 一 大切のりあるハ八百箇と云ふと云ふは八百箇と云ふ  
 白朮の粉と云ふは八百箇と云ふは八百箇と云ふ  
 白朮の粉と云ふは八百箇と云ふは八百箇と云ふ



弓矢可打たり弓ハ果て又もくく弓矢  
 可打右のふらむはけて強より弱てたのみとら  
 一儀倒或も打つ打時ハ外竹之るく一もく一  
 弓矢打時ハ外竹ハ上か一又並置之化を所  
 一弓矢打時ハ外竹之るく一又並置長き記  
 杖と打時ハ外竹ハ上か一又並置長き記  
 杖と打時ハ外竹ハ上か一又並置長き記

一弓矢可打たり弓ハ果て又もくく弓矢  
 可打右のふらむはけて強より弱てたのみとら  
 一儀倒或も打つ打時ハ外竹之るく一もく一  
 弓矢打時ハ外竹ハ上か一又並置之化を所  
 一弓矢打時ハ外竹之るく一又並置長き記  
 杖と打時ハ外竹ハ上か一又並置長き記

一弓矢可打たり弓ハ果て又もくく弓矢  
 可打右のふらむはけて強より弱てたのみとら  
 一儀倒或も打つ打時ハ外竹之るく一もく一  
 弓矢打時ハ外竹ハ上か一又並置之化を所  
 一弓矢打時ハ外竹之るく一又並置長き記  
 杖と打時ハ外竹ハ上か一又並置長き記



或ハ右の草ハ頭上脈鼻の形と作流の如くハ一  
 頭























一 狂をすしむ六本はうしはぐとてまじつぐとまのやを略  
しつとすしむるに夢をうしつとてまじつぐとてまのやの平  
家物語に惟能にありぬりの免罪し引柄の玉ふくち  
りけいこのめがらうの狂をうしはぐとてまじつぐとてまのやの  
耳なりとてくえんたり

一 狂の上を中世にいれむとてまのやをさかひせまじつぐと  
てくえんたりとてまのやの狂をうしはぐとてまのやの  
今うしはぐとてまのやの

一 少宗之狂うしはぐとてまのやの狂をうしはぐとてまのやの  
狂をうしはぐとてまのやの今うしはぐとてまのやの

乃事之さうぐとて割出とてまのやの裁ふれのまのやの  
之を穂の節用集を割出とてまのやの割出とてまのやの  
撰和歌集卷七秋の寄りまのやのまのやのまのやの  
まのやのまのやの 狂のまのやの

君より後まのやの神と秋の狂をうしはぐとてまのやの  
狂を納を枕まのやのまのやのまのやのまのやの  
ひまのまのやのまのやのまのやのまのやの  
まのやのまのやのまのやのまのやの

一 あはれまのやの羽の事真羽の中まのやのありまのやの  
舞まのやのまのやのあはれまのやのあはれまのやの































どろろと云く有り 諸書田用抄に云たり云く乃  
長サ四寸ありと云くたり

一 基石蠅頭のり 本間流す書云角蠅の羽と先白  
とふくくもやま云く一号をいふやく云く云く又  
白くをとりもやま羽と云くたるは基石を云く又  
之をそのこく羽と云くたるは蠅頭と云く

一 三ツ無四ツ物也 けの事 細川云音弓馬中書 慶長八年  
云くけを四ツけぬ 射事 射のり高流也 二説サレ也  
三ツ物也 けと申事 御存るく 中書云云 本ありと云

カケ皮  
卷ワスへ  
シカワテ  
巻水ニキ  
紐茶坊  
之高指  
ノスシ指  
ヲムラサキ  
草無文ニ  
為ニ用元トス

此ハヤ右ノ稱ニ黒物アリシヤ  
カハウシ堅カナリタト差矢始リシ後ノトト見ユ  
ヲムラサキ皮ニテツクハ故ハ不守軍陣卷ワスへ紐ニ紫糸アリ紋アリ略儀ハ名草ノリトハナラズ  
草無文ニニモ友皮ニ無文ト云ハ然地ニモモ友皮ニムラサキヲモモツクニ用元トスハヲナラズノリ  
為ニ用元トス

又巻目下  
分り巻目  
又六分ハカ  
リカケテ  
寸巻ニテ  
ニカカ  
巻目下

一 せんたん巻 せんた巻ニ示の事 せんたん巻ハ  
寸如く志げ有りの本若未若のり者と云く  
十文字のみまをせんごん巻と云く せんた巻  
と云ハ志げ有りの地を志げ有るる地麻糸を漆  
と云ハしけ巻目分志げく巻又分り又二分  
寸如く志げ有るる巻目分志げく巻又分り又二分  
寸如く志げ有るる巻目分志げく巻又分り又二分  
寸如く志げ有るる巻目分志げく巻又分り又二分  
寸如く志げ有るる巻目分志げく巻又分り又二分

一 せんた巻 引り六寸半巻あり 下地より  
麻糸より巻目分志げく巻又分り又二分















